

惜しむ さよなら氷上の温もり ~ 箕面高原スケート🏒

銀盤に弧を描いて、少女たちが軽やかに舞う。大阪府箕面市の「みのお高原スケート」。屋外スケート場としては、関西でも最大規模の5500平方メートル。明治の森国定公園に隣接し、紅葉の名所「箕面大滝」も近い。1985年のオープン以来、延べ150万人が訪れた。今月27日、20年の歴史に幕を閉じる。

ここ数年、入場者はピーク時の2分の1以下に減っていた。リンクの維持には膨大な光熱費がかかり、採算が合わなくなり、昨年3月で閉鎖が決まった。ところが、「閉めないで」という、市民からののがきやメールが殺到したため1年、延長されていた。それも、いよいよ最後。

世界選手権を制した荒川静香選手ら、フィギュアスケートの日本勢は快調で、トリノ五輪でも高橋大輔選手(関西大学)ら若手の活躍が期待される。にもかかわらず、全国のスケート場の集客は伸び悩む。少子化やレジャーの多様化が背景にあるようだ。関西でも、高橋選手が練習場とした「オーツースケートリンク」(大阪府高槻市)、宝塚ファミリーランドスケート場(兵庫県宝塚市)などが次々、姿を消した。

その昔、スケート場といえば、デートスポットだった。この高原のリンクに思い出がある人も多いはず。

試験休みを利用して、最後の記念にと訪れた高校1年同士の2人は「ここなら人目を気にせず、手をつなぐこともできるから」とほおを赤らめ、夕暮れを待つ。ロマンチックな雰囲気は今も変わらない。

大阪出身の主婦、高井和子さん(61)は岡山県旭町から新幹線で、リンクに別れを告げに来た。小学生のころからあこがれはフィギュア選手だった。選手にはなれなかったが、今もスケート靴を手放さない。「ここは青空を仰ぎながら滑走する開放感が最高なのに……。滑れる場所がどんどん減っていく」と寂しそう。

68年のグルノーブル五輪に出場し、NHKの朝の連続ドラマ「てるてる家族」のモデルにもなった岡本(旧姓石田)治子さん(59)も7年前から、ここのスケート教室で教えてきた。「私自身、母に連れられて行ったスケート遊びで面白さを知った。子どもたちに滑る楽しさを伝える場所を失うのはつらい」



広々とした氷原は、親子やカップルが、転んだり抱き起こされたりしながら、温(ぬく)もりを確かめ合う場でもあったかもしれない。閉鎖後はゴルフ練習場に転換されるという。冬の風物詩が、また一つ、惜しまれながら消えていく。

(2005年02月24日 読売新聞)

夜の底に白く浮かび上がる屋外リンク。今季は復活営業したものの、今月末でいよいよ営業終了だが・・・(大阪府箕面市温泉町で、本社ヘリから)

